

29P2-am099

健康成人における総ビリルビン変動

○江田 香織^{1,2}, 横田 愼一^{1,2}, 藤田 朋恵¹, 中村 智美^{1,2}, 神宮 直子^{1,2},
志田 瑞枝^{1,2}, 齋藤 由美子^{1,2}, 黒山 政一², 熊谷 雄治¹(¹北里大学東病院 治験
管理センター, ²北里大学東病院 薬剤部)

【目的】体内のビリルビンは、肝臓にてグルクロン酸抱合を受け排泄される。高ビリルビン血症の原因として先天性ビリルビン代謝異常があるが、かならずしも常に総ビリルビン(以下、T.Bil)の異常を認めるとは限らず、複数回の測定ではじめて高値を示すことがある。そのため、1回の検査では本疾患を判断できないことが多く、試験中の変動が散見される。そこで、北里大学東病院で実施した健康成人を対象とした臨床薬理試験に参加した被験者のT.Bilの変動について調査した。

【方法および対象】1998年4月以降に当院で実施された臨床薬理試験のうち、3回以上の臨床検査が実施された31試験に参加した574名の健常被験者を対象とし、T.Bil変動(最小値、最大値、変動幅、平均値、標準偏差、変動係数)と性別や年齢の関連を検討した。

【結果】T.Bilは男性で高い傾向があった。事前健康診断時の値は、試験中の平均値と比べて高い傾向にあった。女性では事前健康診断時の値と試験中の最大値の相関性が高かったが、一方で男性では相関性は認められなかった。若年者の最大値、変動幅、平均値、標準偏差、変動係数は高齢者より有意に高値であった。

【考察】事前健康診断時は軽度の脱水や必要以上の絶食状態で来院する被験者もあり、これらが T.Bil が試験中に比して高い傾向の要因ではないかと考えられる。事前健康診断時の結果からの各変動(特に最大値)の予測は、若年者では相関係数が幾分小さく、予測性は劣るが、中高年では比較的良好、高齢者では良好と考えられた。